



TITLE:

西[遊]夢録(十四)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

CITATION:

瀧川, 規一. 西[遊]夢録(十四). 地球 1928, 10(5): 357-361

ISSUE DATE:

1928-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183516>

RIGHT:

等を含み珊瑚類がある。上記の化石より横山博

西遊夢錄

(十四)

士は武藏野層と對比して上部鮮新期と推定され
たが恐らく中部乃至上部鮮新期であらう。

瀧川規一

蘇國の部

(XV) ホーリールド宮殿と女皇メリ (3)

メリ女皇と國王ダーンリとの夫婦仲は相變らず險惡であつた。ダーンリは只獨グラスゴ市の父の城に行つたが突然病氣になつた。女皇に敵意をもつ人々は毒殺を計つたのだと騒ぎ出した。然し實際は天然痘であつたらしい。

それが爲めに女皇の往訪をダーンリの方で避けたのであつた。快癒期が近くと皇后はダーンリをエ市に連れ歸つた。然し市長の所有建物であるカーク・オ・フィールド (Kirk O' Field) と呼ばれる小さき家に止宿されて、宮殿には入れなかつた。空氣の流通が良く療養に適するからだと云ふのが公然の理由であつたが、世人はこれ全くホスリエルの陰謀だと疑つた。

女皇は二晩ダーンリの傍にあつて看護をされて三晩目も其

處に留まられる豫定であつた。然しその時、侍女が結婚したので假裝舞踏會に女皇の出場を願ひ出たものがあつた。女皇が其晩松明を點して宮殿に還られることになつた。

出發の前には愛の標の指輪を國王に渡して非常に親しく語り合ひながら數時間も過ごされた。然るに何ぞ圖らんや女皇とダーンリと歡談されて居る間にホスリエル及び其徒黨は寢室の直下の部屋に火藥を詰め込んで居たのである。朝の二時に恐ろしき一大爆音が近隣を震盪した。硝煙が吹き散らされるとカーク・オ・フィールドの家は跡方もなく姿を消し、只碎片のみが四方に散亂してゐるばかりであつた。若き國王の死骸は一人の小姓の死體と共に數ヤード飛ばされて庭園内に發見された。不思議なことには兩人の死體には何の汚れもなく火傷の跡もなかつたと云ふ。これは一五六七年二月十日の朝の一大椿事であつた。この時ダーンリは未だ二十一歳の若

年であつた。

當時の諸作家が筆を揃えて記載する處によると女皇及び諸大臣はダーンリの死屍の處置及び陰謀者の追求に對して冷淡なる態度をとつてゐたこの恐ろしき事件が勃發した翌日に宮殿に於ては女皇御氣に入りの侍女の結婚式及びその宴會の準備が行はれてゐた。五日目の夜陰にはダーンリの遺骸をアベチャーチに埋葬されたが何等壯嚴なる儀式も行はれず宮廷の官人の顔には些も悲哀の色が見えなかつた。六日目に女皇はセトンに行幸され三日間滞在された。女皇の不在中市街の到る處にビラが貼りつけられホスウエルを下手人として攻撃の宣傳が盛に行はれた。それにも拘らずホスウエルは女皇の寵をつないでゐた。世人は疑惑に疑惑を重ねた。

女皇の味方の人々は勿論のこと英蘭のエリザベス女皇までこの事變が將來すべき結果を恐れて、早く下手人を法廷に出せと女皇に忠告した。

宮殿内に於ては一ヶ月半以上經て後始めてダーンリの爲めに追悼會が催された。女皇は同日にダーンリの父レンノツクスに親書を送り、それより以前にレンノツクスが女皇に密告摘發した陰謀者を法廷に拉致せよと命じた。

レンノツクスの摘發狀に列擧された最初の名はホスウエルであつた。然るにホスウエルはこの時既に宮廷内に實權を握りその支配者となつてゐた。

のみならず彼はその實情を知つてか知らずにか逮捕の準備として樞密會議に列してゐた。更に同日には女皇は彼に高價

なる賜物を授けた。彼此の事情を察知してゐた宮廷諸官人はホスウエルこそ女皇が結婚せんと欲する當の人であると噂し合つた。斯くも纏れた糸は如何に捌かれるであらう。

斯くてホスウエルは表面を糊塗する爲めに裁判にかけられた。裁判の當日には武裝せるホスウエルの家の子郎黨が市中に充滿してゐた。案の如く裁判官等は彼を罪なしとして放免した。法官の或者は恐怖の爲めに無罪説を唱へたと考へられ、或者は將來の恩寵を見越して無罪説に賛意を表したとも思はれる。そのうちには彼の味方であつた人々も居つた。兎に角ホスウエルは放免された。

その後議會が開かれた時にはホスウエルは女皇の處簿に加つて國劍を奉持した。やがてホスウエルの行動は益々露骨となつた。女皇がダーンリとの間に出來た儲君に會ふ爲めにスターリング(Stirling)に行幸された時還幸の途中を要してホスウエルは女皇をダンバル(Dunbar)に拉し去つた。

ホスウエルはこの時既に既婚者であつた。前年にハントリ伯の妹を娶つたのであるが、双方から離婚を申し出した。噂に依ればホスウエル夫人は只夫君から殺害の威嚇を受けて止むを得ず離婚を申し出たのである。兎もあれ新舊兩敵の要員によつて離婚は認められた。實に結婚後十五ヶ月目であつた。やがて女皇は第三次の夫君ホスウエルと結婚式を舉行された。この時はさすがに派手な人目を惹くやうな饗宴は一切催されなかつた。數ふればダーンリが爆煙一抹の哀を止めて世を去つた日から僅に三ヶ月と五日であつた。

新らしき女皇夫妻の生活は決して羨ましき幸福なものではなかつた。彼等は互に罪の鳴らし合ひに三週の日を送つた。のみならず怒れる國民の報復を恐れた。遂に宮殿を忍び出てホルスウィツク城(Borthwick Castle)に逃れなくてはならぬやうになつた。協盟諸侯の軍隊(the Army of the Confederate Lords)は尙も彼等に切迫した。その後約十日經て女皇はカルベリヒ(Carberry Hill)に敵の協盟軍と相會し、彼等の強要によつてホスウェルと永別しなければならなくなつた。その後の女皇の生活は既述の如くロツホ・レーヴァン湖上に幽閉され英蘭に奔逃し、英蘭に於ても諸處に轉々して長年月の監禁を受けて後遂にエリザベス女皇の命によつて斷頭臺上の露と消えたのである。

ホーリルド宮は其後蘇國の歴史に變遷を見る毎に慘劇の幕を繰り返へして來た。時代は近づいてヴィクトリア女皇の滯留の日を見、平和の溫光に浴して今日世界の旅人に拜觀を許されるやうになつてゐる。多くの人の血を流さしめたこの宮殿、蘇國史上の各時代に特筆さる可き事件が悽慘なる背景を求めてゐるこの宮殿は恰も歐洲宮室の有名なるグイスマンが小規模ながら幾多の人の血を見て今日納まる可き處に收藏されてゐるに等しき感じを吾人に與へるのである。殊に多事なりし女皇の若き日が愛と政權とに纏れに纏れを重れて史劇の材料を此處に提供してゐることを追懷する時、金色燦たる宮殿内室に血醒き餘臭を嗅く心地のするは、あながち奇矯なる心理の作用によるのではない。

試に玄關子に史論を吹きかけて見る。酒々辯すること數百言女皇を褒貶すると共に史實を説くこと詳細を極める。

文學を專攻にする者は稍もすると、編年的記錄によるより一篇の詩によつて第一印象を作ることが多い。宮殿拜觀券を求めつゝ頭腦に徂來したのは蘇國詩人として人氣を集めてゐる點に於て第一人者であるバーンズのメリ女皇を悼む詩(Lament of Mary Queen of Scots, on the Approach of Spring)である。「嘗つては幸福であつた麗はしの佛蘭西の女皇であり、心軟く樂しき朝夕を迎へた身であつた。蘇國に君臨しては叛逆者陰謀者の數々に圍繞されて、女の胸に泣く血は姉妹にも解されない。女の憐みの眼から敵人の傷口に落つる涙の匂は位置を異にする肉親すら感じない」と云つた詩の一句はエリザベス女皇に對するメリ女皇の心中を窺ひ得て餘りがある。然し詩人ならばともかく、今日そんなことを云つても、英蘭に附屬するをもつて利とする俗耳には入らない。寧ろ宮殿を背景にして活動寫眞を作る利益を説く方が人の耳に入るかも知れない。

(XVI) ホーリルド宮殿拜觀

抑も宮殿と云ひ居城と稱せられる程の大規模の建築物を拜觀する毎に常に感ずることは日常倭小なる建物に目を馴らして來た者が適當なる賞鑑の餘裕を心に持たないことである。言ひ換へれば、田舎者が博覽會を見物して得た程の印象と説明の能力としか持たないことである。彼等も吾等も共に只云

ひ得ることは建物の規模が宏大であつたことや、幾つも幾つとも相似た美しい大きな部屋が数多く相連つてゐたこと、一々記憶するには餘に多く寶物や繪畫が陳列されて居つたこと位である。得たる印象に深さがあつても説明描寫の言葉を驅使することが出来ない。さうした遺憾は宮殿や博物館を素通りした時に常を感じられる。大英國で拜觀した宮城ではウィンズル宮(Windsor)・ハンプトン宮(Hampton Court)・佛蘭西ではヴェルサイユ宮(Versailles Palace)・オランジュ宮(Oranienbourg Palace)などを拜觀したが、益々の遺憾を深く感ずるのみである。

今ホール・ロード宮の殿内に案内された第一の部屋は繪畫の陳列室(Picture Gallery)である。文豪スコットの小説ウェイバリー(Waverley)に舞踏會の光景を細叙して讀者を魅してゐるのはこの繪畫陳列場である。百餘の肖像畫は大抵王侯の肖像であるが、大半は何人が筆者で、畫像の本人が何人であるか判らないと案内人が説明する言葉に却つて興を感ずる。次の部屋は賜宴室(Drawing-Room)である。爐棚の上には既述のレンソックスの一族が殺されたダーンリーの爲に復讐を祈つて居る處を描いた繪があり、左手にはカルベリ丘上に女皇が協盟諸侯の軍隊に降伏してゐる光景を描いた繪がある。その點に於て吾々の興味を惹く。幾つか續く大廣間(State Room)を促され、足速に過ぎつゝ食堂に(The Dining-Room)入る。見覚えのメリ女皇の像がある。ハミルトン大公夫人の客室(The Duchess of Hamilton's Drawing-Room)

と呼ぶる部屋に入ると、この一族の人々の肖像が所狭まげに並んで居る。泣く兒もその名を聞いては泣き止むと云はれた程に勇猛をもつて聞えたジェームス・ダグラスの像はないかと案内に聞くと、それは時代が古過るとして一笑に附し去られる、その時文學研究者ならば知つて居る筈の肖像があるとて教へられたのはトーマス・キリグレン(Thomas Kilgrew)の像である。彼は成程チャールズ一世の小姓であつたが戯曲家であり今日倫敦にあるヅリエリ・レイン劇場(Drury Lane Theatre)のある處に劇場を建てた男である。やがてダーンリー卿の謁見室(Lord Darnley's Audience Chamber)に案内される。ダーンリーの名によつて直に想起するは爆煙に敢無き最後を遂げた若き哀なる彼の末路である。それと共に記憶の興を唆るのはこの部屋に掲げられて居る十六世紀の學者として有名であり。マンツァ(Mantua)で決闘をなし敗死を遂げたジェームス・クライトン(James Crichton)の肖像である。「感心なクライトン」(The Admirable Crichton)として蘇國文學史上に知られてゐる本人である。次の部屋はダーンリーの寢室(Lord Darnley's Bedroom)である。もと／＼壁にタペストリが掛つて居つたが、二十世紀になつて始めて其壁掛を取下ろすと、その下に小窓が開いて居つて其處から覗くと室内の様子が一切見えるやうになつて居たことを發見した。「當時誰がこの窓から覗いただらう」と奇問を發して案内者をも笑はした拜觀者の一米人が居つた。物珍らしげに和蘭製の瓦なりとて爐の周圍の瓦を見て感心してゐた見物

もあつた。一時的たりともメリ女皇の若き胸に戀を覺えしめ
たダーンリーの美しき姿を見たいと思つてそれらしい肖像
畫を見入つて居るとこの繪は本物に非らずとの案内者の一
言に聊か興が覺める。次の小室は同じくダーンリーの化粧室
(Lord Darley's Dressing-Close)である。愈メリ女皇私用
の階段(Queen Mary's Private Stair)を案内者の後に從つて
登る。誠に狭い螺旋階段であつて、下階のダーンリーの部屋を
通り二階の女皇の部屋に通じて居る。卑怯者の寵人ダビッド・
リツチヨを殺害すべく陰謀者等が物騒な様子をなして登つて來
たのはこの階段である。メリ女皇の謁見室(Queen Mary's
Audience Chamber)に入る。天井は四組に分れた十六枚板
があり中央の一組四板には佛蘭西の象徴花である百合花があ
る。蘇國王の紋章である「跳躍せる獅子に寶の抱き合せ」があ
る。メリ女皇が佛蘇兩王家の結縁連鎖をなせし昔をこの天井
の紋章が物語るとしてこゝもと案内者が得意の辯を奮ふ。

この廣間には昔木造の隔板があつてリツチヨの仆れた跡を
見るに忍びずとメリ女皇が作られたのを今取拂はれて居
るとしてその隔壁のあつた跡を指示されて居る。此謁見室こそ
女皇が熱狂なる宗教改革者ジョン・ノックスと論議を交はし
て惱まされた室である女皇の寢室(Queen Mary's Bedroom)
に入つて拜觀者の興味はクライマックスに達する。天蓋付き
の寢臺は王侯の寢室には普通であり、今更感心する程のこと
はない。草莽の微臣たる身にも其後伊太利ツェニスの旅館で
天蓋付きの寢臺で數夜を過したことがある。寢心地に於て
は他の普通の寢臺と少しも變らない。餘談はさておきこの寢

室が吾々の興味を喰ふ所以のものは女皇の身の上話に興を覺
ゆるが故である。埃及に行つた時沙漠の砂を踏みつゝ、
レオパトラの寢室は何處に見られた。毒死した部屋は今も残
存せるや」との奇しき疑問を心に抱いたことがある。時代の差
こそあれ今メリ女皇の若き日の想出に空想を逞しくする寢室
を目前に見て居るのである。次は同じく女皇の夜食堂(Queen
Mary's Supper-Room)である。

狭い小さい部屋である。アーガイル伯夫人と、ローバト・
スチュアート卿と、リツチヨとを相手にして女皇が夜食を召し
て居られた時ダーンリー王をはじめ一味の者等がこの部屋に
闖入し、リツチヨを呼び出し寢室を引きづり廻して謁見室の
向ふ端で遂に殺害した處である。この慘劇の後に病あがりの
ルズヴェンが一杯の葡萄酒を求めたと云はるのもこの夜食
室である。女皇が窓から救ひを求めた様子をされた時陛下を
細断せん("cut her into collops")と云つて一蘇國紳士が女
皇を威嚇したのも此處である。リツチヨの血痕跡には今日で
は眞鍮板でその場處を示して居る。最後にメリ女皇の化粧室
(Queen Mary's Dressing-Close)である。

宮殿拜觀を終つて屋根無きアベチャーチ(Abbey Church)
に入る。敷石に刻した文字によつて知る幾多の先人の墓石を
一歩一歩足の下に踏み歩く。見る影もなく荒れ果てた蘇國の
豪族王家の人々が敵、も味方も今は靜に眠つてゐる。ホーリ
ールド宮を背景にメリ女皇の一生を最近史劇にしたのはジョ
ン・ツリンクワータ(John Drinkwater)である。映畫とし
て見、舞臺の上で見る日も違ふはあるまい。